

〈原著論文〉

# 明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり

——チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ——

‘Inaba-no- shiro-usagi’ as the Beginning of Children’s Books of Kojiki in the Meiji Era

——From Crepe Books by Chamberlain to the “Japanese Old Tale” Series by Iwaya Sazanami——

谷 本 由 美  
(Yumi TANIMOTO)

**Abstract** : ‘Kojiki’ became widely known for the children’s books during the Meiji period. One of them is crepe books “Japanese Tale series”. It was Mr. Chamberlain, a Japanologist who worked to include the myth in this series. Mrs. James, an author of “THE HARE OF INABA” in this series, modified the myth for more educational purposes. This modification influenced other children’s books of Kojiki in those days, “the Japanese old tale” series by Iwaya Sazanami, who is the most famous author of children’s literature in Meiji era in Japan. It is considered that the early children’s books of Kojiki were made independently of what you call Imperialist education.

**Key words** : 児童向け古事記, いなばのしろうさぎ, チェンバレン, ちりめん本, 巖谷小波

## 1. はじめに

『古事記』は奈良時代に編纂された書物だと言われている<sup>1)</sup>。だが、同時代に編纂された『日本書紀』と比べ、長い間ほとんど読まれることがなかった<sup>2)</sup>。古事記が読まれるようになったのは、江戸時代に本居宣長が著した『古事記伝』がきっかけであった。とはいえ、『古事記伝』を読めたのは、ある程度の教養を備えた人に限られていただろう。古事記がより広く、一般の人々にも読めるようになったのは、明治時代以降、児童向けに描かれた古事記（以下、児童向け古事記と記す。）が多く創作されたことが大きく影響していると考えられる。

この時代に古事記が広められた背景には、明治から天皇制が復活したという時代性が挙げられる。古事記は、天皇の祖先を天照大御神と語ることで、天皇家の権威づ

けを意図する書物でもあるからである。児童向け古事記が広められたことも、このことと無関係ではない。特に、国定教科書に載せられた児童向け古事記は、皇国民教育に利用されてきた代表的なものでもあった<sup>3)</sup>。戦前の児童向け古事記のこのような側面については、田中千晶が指摘している通りである<sup>4)</sup>。だが、児童向け古事記は皇国民教育のためだけに生まれたのかというと、実はそう単純なものではない。児童向け古事記に最も頻繁に描かれるのは「いなばのしろうさぎ」だが、この作品が天皇制の文脈とはあまり関連しないことについて、説明がつかないからである。これは国策との関連だけでは見えてこない問いである。

本論文では、明治期にはじめて外国人によって創作された児童向け古事記が収録された「ちりめん本」の「Japanese Fairy Tale Series」と、その後日本人によって創作された「日本昔噺」叢書の「いなばのしろうさぎ」<sup>5)</sup>を取り上げて検討する。

## 2. 「Japanese Fairy Tale」から「日本昔噺」へ

ちりめん本<sup>6)</sup>「Japanese Fairy Tale Series」は全21作品あり<sup>7)</sup>、そのうち「いなばのしろうさぎ」、「やまたのおろち」、「うみさちやまさち」の3作品が古事記神話から収録された。この選択にはイギリス人の日本学者、バジル・ホール・チェンバレンが関与していた<sup>8)</sup>。本論文で取り上げる『THE HARE OF INABA』（明治19年作、和文書名『因幡の白兎』）はジェイムズ夫人による作品だが、彼の英訳『KOJIKI』<sup>9)</sup>の影響が大きいと考えられる。

ところで、シリーズ名「Fairy Tale」とは、通常「妖精物語」や「おとぎ話」、あるいは「作り話」として理解される語であると同時に<sup>10)</sup>「異教の神」を指す言葉でもあり<sup>11)</sup>、古事記をキリスト教徒にとっての異教の神々の物語として捉えて収録されたと考えられる。

だが、「Japanese Fairy Tale」という英語が「日本昔噺」と訳されたために、日本では昔話というジャンルの中に古事記神話が含まれることになった。それまでの日本では、近世から「桃太郎」、「舌切雀」、「猿蟹合戦」、「花咲爺」、「勝天山」といった昔話が5大昔噺として知られていた程度であった<sup>12)</sup>。こうした時期に、古事記神話を収録したちりめん本の「日本昔噺」が作られたことの影響力は大きかったと考えられる。このことは明治の代表的な児童文学作家、巖谷小波が「わが国で初めて単独の著者による児童書の叢書」<sup>13)</sup>として創作した「日本昔噺」叢書（明治27～29年発行）にも、ちりめん本で収録された古事記神話3作品が受け継がれたことから窺える。3作品はその後も児童向け古事記の代表作となり、しかも神話でありながら昔話の一種のように位置付けられていく<sup>14)</sup>。

## 3. ちりめん本『THE HARE OF INABA』と「日本昔噺」叢書『兎と鰐』の形式

まず、ちりめん本『THE HARE OF INABA』と「日本昔噺」叢書『兎と鰐』の両書の形式を順に見ていく。

### 1) 語りの形式

ちりめん本『THE HARE OF INABA』では、表紙に「told to Children by Mrs. T. H. James」と記されており<sup>15)</sup>、ジェイムズ夫人が自分の娘に語り聞かせていたものを元に英文にしたことがわかる<sup>16)</sup>。

一方、巖谷小波の『兎と鰐』も「大江小波 述」「東屋西丸 記」と記されており、ちりめん本と同じく元々

語りから生まれた作品だと記されている。だが同じ「語り」であっても、ジェイムズ夫人における語り（told）とは、母子のコミュニケーションや家庭教育として語られたと考えられるのに対し、小波の語り（述）は意味が異なる。実は、大江小波と東屋西丸はどちらも巖谷小波のことであるという<sup>17)</sup>。その理由は明かされていないが、1つには昔話や神話が元々は語りによって代々伝えられてきたものであったことを、読者に意識させるための工夫であった可能性が考えられる<sup>18)</sup>。また、言文一致の口語文で書かれたものであることを意識させるためのものだとも考えられる。それは当時の言文一致運動と重なるが、平易な英語の口語文で書かれたちりめん本の存在が、その参考となった可能性も考えられる。いずれにせよ、語りの形式の差異から、双方の児童向け古事記を記す上での意識の違いが表れていると言える。

### 2) 一話完結型

近世の『古事記伝』により古事記が一般に知られた後、明治になって児童向け古事記が創作されることとなった。その際、児童向けにわかりやすく伝えるためには、古事記の一部のエピソードを切り取り、一話完結型にする必要があった。原典古事記は、天地開闢から推古天皇まで続く長い物語であり、そのままの形で児童が理解するのは難しいからである。このとき題材として選ばれたのが、本論文で取り上げている「稲羽の素兎」であった。これは児童が読みやすい短い物語にすること、児童に理解できる内容であること、単独でも楽しめる内容であること、一話完結型にしやすい独立性のある内容であること等、稲羽の素兎が児童向けの一話完結型にしやすい条件を備えていたと考えられる。そもそも「稲羽の素兎」は世界中に類話があり、元は一話完結の物語だったのを古事記に組み入れたと考えられる。ゆえに、再度一話完結型に独立させやすい物語だと考えられる。一話完結型「いなばのしろうさぎ」はその後、児童向け古事記の代表作として定番化するが、その元となったのが、ちりめん本『THE HARE OF INABA』であったことは注目すべきだろう。また、短くわかりやすい一話完結型の作品を創作することは、古事記に関心を向けさせることに繋がり、古事記全体を読む前の導入役割にもなり得たと考えられる。当時国策として古事記を教えることが重視されていた背景を考えると、導入となる物語の選択や描き方は、特に重要な問題であったはずである。その導入役割に「いなばのしろうさぎ」が選ばれ、国定教科書にも掲載されていくことになるのである。

一話完結型は小波の『兎と鰐』にも継承され、しかも一話完結型として、より独立性を高めている。それは、物語展開の順番を大きく組み替え、時系列に再構成しているところからもわかる。古事記の「稲羽の素兎」では、最初に八十神たちが「みな国は大国主の神に避りまつりき。」という結論がまず述べられ、「避りまつりしゆゑは」として、その理由を遡って記述する形式をとっている。さらに、その後も痛み苦しんでいる兎に出会ったオホクニヌシ<sup>19)</sup>が「何のゆゑにか、なが泣き伏せる」と兎に尋ねたことで、兎は「痛しみ泣き伏せ」ることとなった理由である和邇とのやりとりを遡って語る形式となっている。物語の中で何度も時間軸が過去に遡る構成となっているのである。この理由には様々な考察があり得るかもしれない。だが、本節の説明を踏まえて言えることとしては、古事記の物語の一部として「稲羽の素兎」を取り込もうとしたとき、前後の物語と繋がりを持たせる必要があったことが指摘できる。古事記では、「稲羽の素兎」が始まる前にオホクニヌシを「(略) 大国主の神。亦の名は大穴牟遲の神といひ、亦の名は葦原の色許男の神といひ、亦の名は八千矛の神といひ、亦の名は宇都志国玉の神といひ、并せて五つの名あり。」と説明した後、いかにして大穴牟遲神から大国主神という名の神となったかについて、遡って説明するのである。だが、一話完結型の「いなばのしろさぎ」では、古事記の前後の物語は切り離されており、そのような説明は省略される。よって、むしろ時系列に並び替えた方が、物語としては読みやすくなると小波は考えたと思われる。より低年齢の子どもにも理解しやすいように語り直されたとも言えるだろう。

#### 4. ちりめん本『THE HARE OF INABA』と『日本昔噺』叢書『兎と鰐』の内容の比較

続いて、ちりめん本『THE HARE OF INABA』と『日本昔噺』叢書『兎と鰐』の内容を検討していきたい。両書は絵本であり、文章と挿絵の両方で作品の世界観を表現している。特に児童向けの本を検討する上で、絵の分析は重要である。そこで本論文では、まず『THE HARE OF INABA』の文章を検討した後、該当する箇所の挿絵の検討を行い、それが『兎と鰐』にどのように変遷あるいは受け継がれたか検討する。検討にあたっては、原典古事記と英訳『KOJIKI』を適宜参照する。

##### 1) 神と prince

古事記を英訳する際、「神」はどのように訳されたの

だろうか。チェンバレンは『KOJIKI』では「Deity」(神)、彼が書いたちりめん本『八頭の大蛇』では「fairy」(異郷の神)と記している。『KOJIKI』が「古事記の逐語訳を目指しており、そうすることによって研究に貢献できると考えていた<sup>20)</sup>と、研究者向けに訳されたのに対し、『八頭の大蛇』は一般西洋人向けに創作されたためと考えられる。

それに対して、ジェイムズ夫人は『THE HARE OF INABA』で「prince」(皇子)と記している。この表現からは、どのようなことが考えられるだろうか。まず、「神」を意味する言葉を選ばなかったことについては、キリスト教以外の神を語ることを避けた可能性が考えられる。だが、それだけならばチェンバレンの『八頭の大蛇』のように「fairy」と記すことも可能だったと思われる。2つ目に考えられることとしては、彼女が古事記の神々を歴史上の人物(皇子)として捉えていた可能性が考え得るかもしれない。だが、物語全体を見てみても、オホクニヌシを天皇と結びつけたり、歴史的事実であるかのように語る場面は見られない。それどころかオホクニヌシを「the eighty-first brother」と記し、物語の主要な存在であるにも関わらず、固有名詞を一度も出さないのである。名前が記されないだけでなく、オホクニヌシが皇祖神天照大御神と血縁があることや、皇孫の邇邇芸命に国を譲ったこと等も一切語られていない。徹底して「the eighty-first brother」がどのような神なのか記すのを避けているようにも思われる。すなわち、ここでの「prince」とは、歴史上の皇子を表したのではなく、昔話に登場するいつの時代のどこの誰とも特定しない、一般的な「prince」以上の意味は持っていないことがわかるのである。ここから、ジェイムズ夫人は『THE HARE OF INABA』を神々の登場する神話や、神々と天皇の血縁を語る歴史として解釈したのではなく、日本の昔から伝わる昔話として解釈していたことが見て取れる。つまり、チェンバレンとは異なり、「Fairy Tale」も「異教の神の物語」ではなく、ごく一般的な意味での「おとぎ話」として捉えていたと考えられる。

このように、ちりめん本において「prince」と記されたオホクニヌシや八十神は、挿絵ではどのように描かれているだろうか(図1-A)。すぐに目につくことは、彼らの衣装が中世の造形に近いことである。もちろん神々の衣装の造形に正解があるわけではない。だが、それまで絵画に描かれてきた神々の衣装は、通常古代の大和朝廷の皇子が纏っていたものを参考に描かれているものが多い。これは一見挿絵画家小林永濯<sup>21)</sup>の時代設定ミスか

のようにも思われる。だが、永濯は同じくちりめん本の『八頭の大蛇』の挿絵も担当しており、そこでは他の多くの絵画と同様、古代の衣装造形を元に描かれている。このことからすると、永濯は『THE HARE OF INABA』の衣装造形を意図的に他のものと異なるものにした可能性がある。もし意図的とするならば、それはなぜだろうか。1つには、『THE HARE OF INABA』では、既述したように神ではなく「prince」の物語に改変されたことが関係する可能性がある。つまり、神らしくならない造形にするためには、これまで神を描いた絵画とはあえて異なる衣装造形にしたいと意図した可能性が考えられる。2つ目には、『THE HARE OF INABA』の「prince」は、歴史上に存在したと考えられる古代大和朝廷の皇子ではなく、時代を特定しない昔話の一般的な「prince」として設定されていたことである。時代を特定せず、漠然とした昔の日本の「prince」として描くには、古代に特徴的な衣装造形ではなく、近代から見て「昔」にあたる中世の衣装造形を参考にしたとも思われる。

では、小波の『兎と鰐』ではどのようにになっているか見てみる。『兎と鰐』では、「大国主命」、「八十神」と記され、ちりめん本の「prince」は引き継がれなかった。そのことに合わせるかのように、挿絵の衣装デザインも古代のものを参考に描かれている（図1-B）。また、「此の大国主命と仰有るのが、即ち出雲の大社様。」と記され、やや現実の神道と結びつけられる。だが、物語の結末部に後日談としてこの一文があるのみで、この一文をもって国家神道や皇国民教育と結びつけるようなものではないと考えられる。単に子どもが身近に感じ、面白く読めるための工夫と考えられる<sup>22)</sup>。

## 2) 八十神は悪か

ちりめん本では、上述のように神を「prince」としたことで、特徴的に表記されるようになったことがある。それは、人間らしい性格描写である。オホクニヌシを「good and gentle」や「did not like their (八十神の) rough, quarrelsome ways」, 「kind and good」と説明し、八十神を「all jealous of one another」や「they agreed in hating, and being unkind to the eighty-first」, 「eighty bad brothers」と説明している。ここではオホクニヌシ=善、八十神=悪というように、個人の間人間が持つような性格描写を入れ込んでいる<sup>23)</sup>。このような表現は古事記の原文にも、英訳『KOJIKI』にもないものである。

ただし、オホクニヌシと八十神を善悪で解釈する視点

は、ちりめん本が初めてではない。近世の本居宣長の『古事記伝』にも見られる。宣長は「此ノ菟は、八十神のために、何の怨仇ならぬを、かく令悩るは、甚も悪有神たちなりけり。凡て由なきすさみに、物を傷ふことは、昔も今も不善人の爲ることなりかし。」<sup>24)</sup>と、善悪の対比として注釈している。これら近世の書物をジェイムズ夫人が読んだとは考えにくいだが、彼女の周りにいたチェンバレンやラフカディオ・ハーン<sup>25)</sup>らから聞いていた可能性はある。

だが、『THE HARE OF INABA』がオホクニヌシ=善、八十神=悪の作品となったのは、作者ジェイムズ夫人の価値観も反映されているはずである。個人の人間の善悪の物語として解釈することは、近代西洋の個人主義の思想や、キリスト教的な価値観とも一致しやすかったと考えられる。さらに、西洋の児童教育で好ましい作品として読まれていたインソップ童話等に善悪の教訓譚が多くあることも関係するかもしれない。彼女は稲羽の素兎を西洋人の子どもにとって面白く、教育的に好ましい内容に改変したと考えられる。このように見ると、『THE HARE OF INABA』から始まるオホクニヌシ=善、八十神=悪という性格描写は、近世の宣長の影響と近代西洋の思想や児童教育の影響が合わさったものと考えられる。

では、挿絵ではどのように描かれているだろうか。永濯の描く挿絵には、八十神の絵は3場面ある。1枚目はぞろぞろと山を登っており、後方の2人がオホクニヌシの方を振り返っているが、気遣っているのか強く命令しているのか、表情は読み取りにくい。だが、本文の「rough, quarrelsome」のように、あからさまに乱暴な様子には描かれていない。2枚目は兎を複数の八十神が取り囲んでいる様子である。この場面の表情もはっきりとは判別しにくいだが、何人かは顔に手を当てたり、かがみ込んで兎と接したりしており、心配しているようにも見える。そして3枚目では、八上比売とオホクニヌシの結婚を見ている様子である（図1-A）。ここでは多くの八十神が明らかに笑っており、祝福しているように見える。このように、全体的に読み取りにくい表情ではあるが、本文のように八十神を悪としては描いていないと言える。「prince」の設定では、挿絵も文章の表現に合わせていたが、八十神の性格設定までは共有していなかったと指摘できる。これは文章作家と挿絵作家の解釈の違いの表れとも言える。同時に、当時は八十神を悪とする解釈だけでなく、悪とはしない解釈も存在し、どちらかに固定していたわけではないことが窺える。

このような性格設定は、小波の『兎と鰐』にも受け継がれる。『兎と鰐』では、大国主命は「優しく」や「道理こそ慈悲深く」と表現し、八十神は「意地の悪い」と表現するように、やはり大国主命＝善、八十神＝悪という描写を意図的に入れ込んでいる。だが2枚描かれた八十神の挿絵を見ると、1枚目の兎を取り巻く八十神は、ちりめん本の挿絵より表情豊かで優しい表情に描かれている。2枚目はオホクニヌシと八上姫の結婚を笑顔で祝う姿であり、拍手をしている八十神もいる(図1-B)。

このように文章では八十神は悪として、挿絵では八十神は悪ではない存在としてそれぞれ受け継がれていったことがわかる。この傾向は、その後のお伽文庫にも受け継がれるが<sup>26)</sup>、国定教科書では挿絵の数が減り、八十神の絵は描かれなくなる<sup>27)</sup>。それにより、八十神を悪とする文章だけが残ることとなり、児童向け古事記において八十神は悪の解釈だけが定番化し、現代の教科書にまで受け継がれていくこととなった<sup>28)</sup>。

八十神を悪とする解釈は、現在古事記研究においても主要な解釈となりつつある<sup>29)</sup>。だが、その解釈が適切かは、明治の「いなばのしろうさぎ」分析から見ても疑問に感じる面もある。『THE HARE OF INABA』と『兎と鰐』では、八十神を悪とし、善悪の教訓譚としたために、他の箇所も改変しなければ辻褄が合わなくなった箇所がある。善者が幸福を得るといふ教訓的な物語にするならば、悪者八十神が苦しめ、善者オホクニヌシが助けた兎は善でないと、教訓譚としては辻褄が合わない。だが、兎は一方で和邇を騙す存在であり、近代の価値観では悪と捉えられる行動をしている。その矛盾を解決するために、『THE HARE OF INABA』では、鰐が兎に「plucked off all my fur」となったことについて、オホクニヌシは「And serve you right too, for being so tricky.」と、騙した報いだと言う。『兎と鰐』では、オホクニヌシが「しかしそれもみんな、初めに鰐を誑かしたのが、お前の悪いのだから仕方がない。」と言い、兎も「それはもうようく存じて居りますので、これからはもう決してあんな事は致しません」と反省の弁を語るのである。このような改変をしなければ矛盾が生じるということは、そもそも原典古事記は善悪の教訓譚として描かれたわけではなかった証でもあるのではないだろうか。

### 3) 兎の造形

次に、兎の造形を見ていく。『THE HARE OF INABA』では、兎を「hare」と訳している。これは英訳『KOJIKI』の訳と同じである。兎は野兎の hare の他に

飼い兎の rabbit があるが、イソップ童話で狡猾な性格で登場する兎は hare である<sup>30)</sup>。「稲羽の素兎」も和邇を騙す存在であることから、イソップ童話と同じく hare と訳された可能性がある。

また、古事記では兎はオホクニヌシの指示に従い元に戻った後、「素兎」と表記される。この解釈は未だ定まっていないが、「白兎」と解釈されることも多く、現代の児童向け「いなばのしろうさぎ」でも「白兎」と設定しているものもある<sup>31)</sup>。だが、『THE HARE OF INABA』では特定の色の記述はされていない。『KOJIKI』では「素兎」の箇所を「white hare」として、白兎と訳しながら、注において「Motowori and Moribe agree in considering that the word “white” means “bare” in this place, and the latter in his Critique of the former’s Commentary quotes examples which show that view is probably correct.」と、「しろ」は「裸」を意味する説を記している。『THE HARE OF INABA』では、複雑な解釈を省略し、hare とだけ記したと考えられる。しかも、古事記原文で「素兎」は「今者に、菟神といふ。」と記されるが、『THE HARE OF INABA』では兎は神とは記されない。

兎を単なる動物の兎として解釈しているのは、原文古事記の「あが衣服を剥ぎき。」の箇所をどのように表記したかにも表れている。古事記研究では、この「衣服」の解釈についても様々な説があり、見解は分かれているのである<sup>32)</sup>。英訳『KOJIKI』では、注においては「Literally “to its original skin” ; that is to say that its skin would again be covered with fur.」とあるように「皮が再び毛におおわれる」と記しているが、本文では「stripped off all my clothing」と原文の表現を尊重して訳している。だが、ジェイムズ夫人は「plucked off all my fur」と、「fur」(毛)と訳している。これは兎をイソップ童話の動物の昔話と同じように捉え、単なる動物の兎と解釈したことから、「毛」という一義的で現実的な解釈になったのだと考えられる。

では、挿絵ではどうなっているだろうか。『THE HARE OF INABA』の挿絵では、兎は白兎となっている(図2-A・3-A)。カラーの挿絵である以上、何色かに特定せざるを得ないという難しさもあるだろう。だが、それよりも印象的なのは兎が赤い衣服を着ていることである。これは古事記原文の「衣服」に対応している表現である。「あが衣服を剥ぎき。」の場面では、文字通り衣服が剥がれる絵が描かれており、ジェイムズ夫人の文章とは一致していない。これは、「毛を抜く」という表現が児童には残酷だと避けられた可能性もある。だが、原文の

表現を尊重するための思いきった手法として評価できる。しかもひとときわ目立つ真っ赤な衣服で描かれ、挿絵の見せどころとして強調していたことが窺える。

このような兎の表現も、小波『兎と鰐』に受け継がれた(図2-B・3-B)。すなわち小波の文章では「毛をすつかり抜いて」と表現され、挿絵では衣服を剥がれる絵が描かれている。だが、現代では八十神の解釈と同じく、文章の解釈だけが受け継がれ、「素兎」や「衣服」という言葉が持ち得る多義性を失い、ただの動物の兎と解釈されるようになった<sup>33)</sup>。

#### 4) 和邇の造形

次は「和邇」の造形について見てみる。和邇の意味についても、鰐や鯨をはじめ、従来から様々な解釈があり、見解が分かれている<sup>34)</sup>。チェンバレンは、英訳『KOJIKI』の注で諸説引いた上、「The translator therefore sees no sufficient reason for abandoning the usually accepted interpretation of/wani/ (鰐) as “crocodile.”」と、和邇は「crocodile」だと考察し、『KOJIKI』の本文でも「crocodiles」と訳している。『THE HARE OF INABA』でも「crocodiles」と記され、チェンバレンの影響と考えられる。

挿絵においても和邇は鰐として描かれ(図2-A・3-A)、それは小波の『兎と鰐』にも受け継がれる(図2-B・3-B)。ところで、鰐は日本に棲息していないにもかかわらず、挿絵画家はどのようにして鰐の絵が描けたのだろうか。実は、日本において鰐の絵が描かれることは初めてではないのである。例えば江戸時代上方で描かれた『今昔雀実記』でも、「鯨・飛竜・鰐・鱗など、いと恐ろしき鱗の絵が見られる。」という文章と共に、鰐の絵が描かれている。そこでは珍しく、恐ろしい魚や想像上の海獣の中に鰐が含まれている<sup>35)</sup>。『日本書紀』を英訳したウィリアム・ジョージ・アストンは「May not the/wani/have been a cetacean; perhaps the porpoise? I have translated/wani/by “Sea-monster”」<sup>36)</sup>と、鰐を「Sea-monster」と解釈しているが、これは近世の鰐の捉え方と近いのではないかと考えられる。近世・近代では実際の鰐は見ることでできないものであったため、鰐の絵は面白がられ、しばしば描かれたのだと思われる。

#### 5) 兎と和邇

「稲羽の素兎」の面白さの理由には、兎と和邇の関係の特異さにもある。通常兎と和邇を比べると、兎は小さく弱く、和邇の方が大きく強いと考えるだろう。しかし、その常識を覆し、「稲羽の素兎」では、兎が知恵で

和邇を騙すことで、強弱関係が逆転する。しかもこのとき、騙すことで強者となった兎を賢いとするか、狡いとするか、正反対の評価があり得る。それは和邇についても同様で、騙されたことを可哀想とするか、馬鹿だと考えるかで評価は正反対となる。このように、小さく弱い陸生生物が大きく強い水生生物を知恵によって騙す話は、東南アジアを中心に多くの類話が報告され、「稲羽の素兎」のルーツと考えられている<sup>37)</sup>。

だが、古事記の「稲羽の素兎」はそれだけでは終わらない。騙されていたことを知った和邇が、兎の衣服を剥ぐのである。これは、古事記独自の展開であり、編者が意図的に作り替えたと思われる。従来は、オホクニヌシが王の資格として医療の知識を持っていたことを示す物語と繋げるために、兎は傷ついた状態である必要があったと考察されている<sup>38)</sup>。これは、古事記全体の展開を捉える上では妥当な見解と思われる。しかし、兎と和邇の物語の展開を捉える上でも、和邇が兎の衣服を剥ぐエピソードは重要だったと考えられる。そもそも、オホクニヌシの王の資格を語るためだけの理由ならば、わざわざ兎が傷ついた理由として、和邇とのエピソードを語る必要はなかっただろう。和邇が兎の衣服を剥ぐことは、両者の強弱関係が更に逆転することを表している。しかも衣服を剥がれ、再び弱者となった兎を可哀想と考え、和邇は残虐だと考えるか、和邇の行為は当然であり、先に騙した兎の自業自得と考えるか、またしても正反対の評価が成り立つ。

つまり、ここには2種類の面白さがある。1つは、兎と和邇の強弱関係が2転3転と逆転することである。もう1つは、兎と和邇のどちらが被害者で、どちらが加害者なのか、見る視点により正反対の評価があり得ることである。兎を中心に見ると、和邇を騙したのは海を渡るためには仕方ないことであり、兎が賢く和邇が馬鹿だと考えられ、衣服を剥がれたのは可哀想で、和邇は残虐だと言える。一方、和邇を中心に見ると、和邇は兎に何も悪いことをしていないのに騙されて可哀想であり、兎は衣服を剥がれても当然だと言える。この2つの考えは、どちらも真でありつつ、両立し得ない。片方の考えを受け入れると、他方の考えは成立し得なくなる矛盾となっているのである。

それが『THE HARE OF INABA』ではどのように描かれたか見ると、概ね原文に沿ってはいるが、「And serve you right too, for being so tricky.」とある。これは既述した教訓譚の改変とも重なるが、ここでは両立し得ない矛盾を矛盾のまま描くよりも、兎の方が悪かったと評価す

る視点がやや強くなっている。一方『兎と鰐』では、兎と鰐のやりとりを大幅に加筆し、兎と鰐それぞれの立場を原文以上に詳細に記している。ここからは、小波が兎と鰐の関係にある矛盾を面白いと考え、この部分の物語を膨らませた可能性が考えられる。『兎と鰐』では、大國主命が「初めに鰐を誑かしたのが、お前の悪いのだから仕方がない。」と兎を咎め、兎の方が悪かったと評価する一方、兎が「これからはもう決してあんな事は致しません」と反省の弁を述べることや、物語の冒頭に「何卒して因幡の国の方へ、行て見たいと思ひますから、毎日一―浜辺に立て、其方ばつかり眺めて居りました。」と、いかに兎が海を渡りたかったかという兎の言い分も説明され、兎と鰐双方の視点が見えるように工夫されている。だが、鰐が兎の「身体中の毛をすつかり抜い」た後、「可哀さうなのは兎です。」と記される等から、やや兎に同情的な評価が強いこともわかる。

##### 5. おわりに

古事記が一般に広く知られるようになったのには、本論文で取り上げた明治期の児童向け古事記の影響が大きかったと言える。原典古事記のままでは、ここまで広めることはできなかっただろう。特にちりめん本で描かれた後、当時の著名な児童文学作家の小波に受け継がれた意義は大きい。彼が児童向けにわかりやすく、しかも言文一致体の平易な日本語で書き表したことで、古事記は児童を含め多くの人々が読める作品となった。だが、その前段階にはまず、平易な英文で書かれたちりめん本があったことは重要と考えられる。

また、児童向け古事記といえば、これまで国定教科書に代表されるように、皇国民教育に利用されたものとして捉えられてきた。しかし、元々の児童向け古事記は外国人によって作られたものであり、皇国民教育とは無関係であった。ちりめん本の児童向け古事記は、1つには昔話の一種として作られた。2つ目には西洋の児童教育のための読みものという性格が受け継がれ、教育譚として読み替えられた。これらの性格は、小波の「日本昔噺」にも受け継がれた。

他にも、両作品は児童向けにするための様々な工夫を凝らしている。例えば、時系列に並べ変えることで児童の理解力に合わせたり、「衣服を剥ぎき」等、原文解釈の難しい箇所は「fur」、「毛」と要約あるいは省略したり、兎と鰐のやりとりを物語の見所として原文以上に拡大し、膨らませたりしていた。さらに、古事記という長い物語を一話完結型に切り出したことや、挿絵を多く入

れることで文と絵の両方で読み解けるようにしたことも挙げられる。

このように、様々な方法でわかりやすくするために改変された児童向け古事記を理解することは、原典古事記を読む導入ともなる。それは、児童向け古事記が古事記の要約として理解される側面もあることからわかる。だが、児童向け古事記は原典古事記とは異なる内容に改変された作品であり、それを要約と捉えて原典古事記を読むと、原典を実際とは異なる解釈に理解してしまうこともあり得る。国定教科書で、児童向け古事記を利用し、古事記を歴史的事実として教えたことが重大な誤りだったと反省される理由もそこにある。既述の通り、導入となったちりめん本には皇国民教育の意図はなかったが、導入後、皇国民教育に結びつけられる側面も出てきている。それでも、「いなばのしろうさぎ」が児童向け古事記の代表として、古事記の導入に選ばれてきたのは、天皇制とは関係なく「稲羽の素兎」という物語が持つ豊かな面白さからだと考えられる。このことは児童向け古事記の問題だけに留まらず、原典古事記にも天皇制の文脈とは別の評価の可能性があることを示唆していると言えるのではないだろうか。「児童向け」の話を作ることの大事さと問題点は、こうした歴史的経過を辿ること、初めて見えてくるところがある。

テキストは以下のものを使用した。

- ・英国ジェイムス夫人編述『Japanese Fairy Tale Series, No.11 THE HARE OF INABA (日本昔噺第十一号 因幡の白兎)』発行者東京府平民長谷川武次郎 明治十九年十二月七日出版 (同志社大学図書館所蔵)
- ・巖谷小波編『複製版 日本昔噺』臨川書店 1971年
- ・translated by B. H. Chamberlain『THE KOJIKI or Records of Ancient Matters』Rutland, Vt.; Tokyo: C. E. Tuttle 1982年
- ・西宮一民校注『新潮日本古典集成 古事記』新潮社 1979年

図1-A, 3-A は宮尾與男編『対訳日本昔噺集第2巻』彩流社 2009年、図2-A は放送大学附属図書館編『放送大学附属図書館所蔵目録 ちりめん本 長谷川武次郎とちりめん本の歴史』放送大学附属図書館 2001年、図1-B, 2-B, 3-B は巖谷小波『複製版日本昔噺』臨川書店 1971年を使用した。

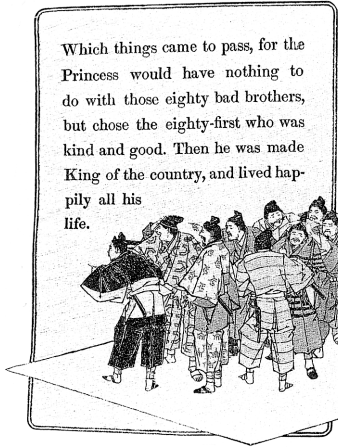


図 1-A (ちりめん本)



図 1-B (小波『兎と鰐』)

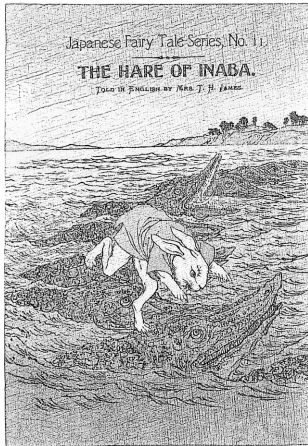


図 2-A (ちりめん本)



図 2-B (小波『兎と鰐』)

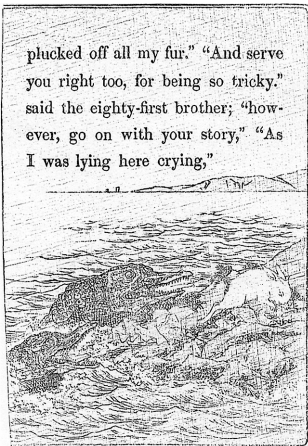


図 3-A (ちりめん本)

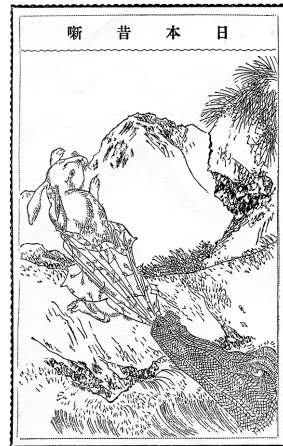


図 3-B (小波『兎と鰐』)



注

- 1) 成立時期には諸説あるが、一般的には序文に記される通り712年と考えられている。
- 2) 日本書紀は正史として、平安時代以降も宮中で講義が行われる等、読まれていたのに対し、古事記はその参考程度とされた。
- 3) 三浦佑之編『古事記を読む』吉川弘文館 2008年 p.p.196~212
- 4) 田中千晶「戦時下における児童向け『古事記』の受容と変容—引用の観点から—」『児童文学研究40』2007年
- 5) 本論では、児童向けに書かれた作品を「いなばのしろうさぎと、平仮名表記で統一して呼び、原典古事記の「稲羽の素兎」とは表記を変えることで区別することにする。
- 6) 石澤小枝子『ちりめん本のすべて 明治の欧文挿絵本』三称井書店 2004年によると、ちりめん本とは、「クレープ状に細かく皺を寄せた和紙の小型和綴じ本」(p.1)の絵本であり、明治18年から英文・仏文・独文・蘭文等で出版された。「Japanese Fairy Tale Series」(和文書名「日本昔噺」)は外国人の土産用となった他、特に英語版は日本国内において小学生の英語テキストとして使用された(p.226)。
- 7) 『桃太郎』、『舌切雀』、『猿蟹合戦』、『花咲爺』、『勝々山』、『鼠の嫁入り』、『瘤取』、『浦島』、『八頭の大蛇』、『松山鏡』、『因幡の白兎』、『野干の手柄』、『海月』、『玉の井』、『俄の藤太』、『鉢かづき』、『文福茶釜』、『竹籠太郎』、『羅生門』、『大江山』、『養老の瀧』、(すべて和文書名)の21作品がある。
- 8) 石澤 前掲『ちりめん本のすべて』p.35, p.38, p.42
- 9) 明治15年にチェンバレンは古事記を英訳し、日本アジア協会の紀要に発表した。
- 10) 小西友七編『ジーニアス英和辞典 改訂版』大修館書店 1994年
- 11) 高島一美「ちりめん本『日本昔噺』シリーズ“The Serpent with Eight Heads”(『八頭ノ大蛇』)考—チェンバレンの翻訳姿勢と日本理解—」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要(9)』2011年 p.p.25~35でも指摘されている。
- 12) 日本の昔話を外国語訳されたものとしては、明治4年にミッドフォード『昔の日本の物語』がある(A. B. Mitford; with illustrations drawn and cut on wood by Japanese artists『Tales of Old Japan』Rutland: C. E. Tuttle 1981年)。この作品には古事記を元にした作品は収録されていなかった。
- 13) 上田信道校訂『日本昔噺』平凡社 平成13年 p.468
- 14) 2011年度国語教科書にもこの3作品が選ばれた上、昔話のように紹介されている。(谷本由美「二〇一一年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」—多義性の視点から日本神話再登場のあり方を考える—」『児童文学研究(44)』)
- 15) 同志社大学図書館所蔵のものに記載。宮尾與男編 前掲『対訳日本昔噺集第2巻』p.93に紹介されているものは、「TOLD IN ENGLISH BY MRS.T. H. JAMES」と記されており、版により違いがあることがわかる。
- 16) 石澤 前掲『ちりめん本のすべて』p.37
- 17) 勝尾金称『巖谷小波 お伽作家への道—日記を手がかりに』慶應義塾大学出版会 2000年 p.169
- 18) 山本正芳編『近代文体形成史料集成 成立篇』桜楓社 1979年 p.p.774~775
- 19) 古事記において大穴牟遲神は「亦の名を大国主神」と記され、「稲羽の素兎」では大穴牟遲神と表記されている。古事記研究においては、大穴牟遲神と大国主神という呼び名の使い分けの意味を考えることは重要であり、混同すべきでないと考ええる。だが、本稿では引用文以外で古事記の大国主神・大穴牟遲神を指すときは、便宜上オホクニヌシと記す。
- 20) 平藤喜久子「初期ジャパノロジストたちと神話学」『東アジアの古代文化(137)』大和書房 2009年 p.p.260~261
- 21) 元々井伊家に仕えた狩野派出身で、フェノロサも高く評価した日本画家であった。(石澤 前掲『ちりめん本のすべて』p.240)
- 22) ただし、当時の国民国家の時代性と重なることで、政治的な意味が後づけされて受容されることはあり得る。(久米依子「巖谷小波『日本昔噺』の近代性—国民国家時代と昔話のイデオロギー—」『文学研究92』日本文学研究会 2004年 p.p.1~12
- 23) 野崎琴乃「近代におけるイナバノシロウサギ—古事記の享受史を考える—」『語文(117)』日本大学 2003年 p.p.1~23
- 24) 倉野憲司校訂・本居宣長撰『古事記伝(三)』岩

明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり

- 波書店 昭和17年 p.67
- 25) ハーンもちりめん本創作に参加していた。(石澤前掲『ちりめん本のすべて』 p.37)
- 26) 森林太郎・松村武雄・鈴木三重吉・馬淵冷佑(選者)『標準お伽文庫 日本神話上下』培風館 1920年(平凡社から1972年に復刻されている。)
- 27) 海後宗臣他編『日本教科書大系 国語1~6』講談社 1963~1964年
- 28) 谷本 前掲「二〇一一年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」
- 29) 例えば三浦佑之は「いじ悪な兄とやさしい弟という伝承の様式が引き出されてきます。」と述べている。(三浦佑之『古事記講義』文藝春秋 2007年 p.300)
- 30) アト・ド・フリース(山下主一郎他訳)『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984年 p.312
- 31) 例えば、石破洋は白い兎ではないと述べている。(石破洋『イナバノシロウサギの総合研究』牧野出版 2000年 p.p.9~14) 一方、神野志隆光らは、「素」には繊維が白という意味があり、「衣服」の比喩であると述べる。(神野志隆光・山口佳紀『古事記』注釈の試みー稲羽の素菟ー』『論集上代文学14』1985年 p.p.250~251)
- 32) 鈴木啓之は白い毛と解釈している(鈴木啓之「古事記「稲羽の素兎」訓義攷ー「素」字の使用意義をめぐってー」『古事記年報31』1989年 p.42)。北東アジアの類話研究では、皮を剥がれることがシャーマニズムにおける「死と再生」を意味するという指摘が門田真知子編『比較神話から読み解く因幡の白兎神話の謎』今井出版 2008年等で見られる。
- 33) 谷本 前掲「二〇一一年度小学校教科書の「いなばのしろうさぎ」
- 34) 例えば、西宮一民は鮫と解釈し(西宮一民「稲羽の素兎と和邇」『皇學館大学紀要16』1978年 p.p.5~11)、篠田知和基は鰐と解釈している(篠田知和基『世界動物神話』八坂書房 2008年 p.p.233~234)。一方、福島秋穂は「唯漠然とした魚類、のあるものとしておくのが良い」とし(『我国文献記載神話に登場する「鰐」についての解釈をめぐって』『文芸と批評216』1967年 p.p.1~15)、中村啓信は「鰐は棲息しないが知識と恐るべきイメージは早く輸入されていたとみられ、鮫との混交イメージで「わに」が用いられたのであろう。」と述べている。(中村啓信『新版古事記』角川書店 2009年 p.p.50~51)
- 35) 中野三敏、肥田皓三編『近世子ども絵本集 上方篇』岩波書店 1985年 p.86
- 36) translated by B. H. Chamberlain『THE KOJIKI or Records of Ancient Matters』Rutland, Vt.; Tokyo: C. E. Tuttle 1982年 p.37
- 37) 最近では門田編 前掲『比較神話から読み解く因幡の白兎神話の謎』等
- 38) 中西進前掲『古事記をよむ1』1985年 p.231等 (2011年11月9日受理)